



TITLE:

経済学における理論と実践 - 下向 ・ 上向法の弁証法について -

AUTHOR(S):

吉村, 達次

CITATION:

吉村, 達次. 経済学における理論と実践 - 下向・上向法の弁証法について -. 経済論叢 1965, 95(6): 433-445

ISSUE DATE:

1965-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/133072>

RIGHT:

經濟論叢

第九十五卷 第六號

経済学における理論と実践	吉村達次	1
1890年代論争にあらわれた ロシア資本主義論の類型 (1)	田中真晴	14
零細専業農家の堆積構造	福本邦行	39
不働費計算・理論の史的考察 (2)	西村明	56

昭和四十年六月

京都大學經濟學會

経済学における理論と実践

——下向・上向法の弁証法について——

吉 村 達 次

I

1 マルクスは、経済学的認識の方法として、まず具体的なものから出発して抽象的なものにいたる下向法と、そうしてえられた抽象的なものから具体的なものに立帰る上向法の必要を説いた。また、下向法に重きをおく古典学派に対して、一見単なる思惟の自己運動とみえる上向法の科学的意義を強調した。もとより、マルクスは下向法を無視したのではなく、上向の不可欠の前提としての意義はこれを正しく認めていたのであって、両者は相互補足的関係において科学的認識の方法とみなしたのである。

このような認識方法または思惟の運動形式としての下向・上向法の重要性を認めたのはマルクスだけではない。具体—抽象—具体とすすむ思惟の円環的運動は、対象を科学的に認識しようとするかぎり、本来したがわねばならない方法であり、近代科学の発展とともにこの方法の意義も漸次明確に意識されてきたのであって、マルクスはそれをうけついで、認識方法としての意義を確固たるものにしたのである。そのためには特に、上向法について、ヘーゲルの観念論的残渣を洗いおとすことが決定的に重要であった。具体的なものから出発するのではなく、思惟から出発して具体的なものを思惟の産物——思惟の純粋な自己運動の産物——とみなすヘーゲ尔的観念弁証法に対して、下向法・上向法を統一的に理解することによって、上向の弁証法的過程を唯物論の基礎の上に据えなおしたのである。ともあれ、この思惟のはたらきによって、具体的なものは抽象的概念の総体として頭脳のなかに再生産されるのである。

このような諸概念の全体的な連関は理論体系にほかならない。諸科学はその

発展とともに、下向法によって抽出された個々の抽象概念の相互の連関を順次追跡して（上向法）、それぞれの理論体系をつくりあげていったのである。理論体系とは対象の内的組織を諸概念の連関としてえがきだしたものにほかないからである。

経済学の理論体系の完成の跡をふりかえってみればこのことは明白である。ペティーにはじまる経済学の科学的研究によって発見された個々の経済学的諸範疇は、ジェームス・スチュアートをえて、A・スミスの『国富論』において壮大な体系化がこころみられ、資本主義経済は一個の有機的全体としてしめされるようになった。この体系化にあたって、下向・上向法はなお不完全なかたちであったが、また明確に意識されたわけでもないが、実際に適用されたのである。

マルクスによってこの方法は完成された。その意義は、いままで不明確・不完全であったものを明確かつ完全なものにしたというだけでなく、それに唯物弁証法的内容をあたえることによって、客観過程のより深いより高次の把握を可能にしたという点にある。すなわち、歴史的発展過程をも概念的に把えて理論体系のなかに包括しうるようにしたのである。ヘーゲルの観念論を批判しただけでなく、その弁証法を唯物論的に仕立直し、客観をとらえる思惟の方法として活かしたところに、マルクスの積極的意味があったのである。

2 このように、下向・上向法が対象認識の方法として、対象の内的構造を正しく把え、それを思惟の世界に再現せしめるためには、どのような条件が必要であろうか。マルクスは経済的諸形態の分析においては「顕微鏡も化学的試薬も役に立たない」「抽象力のみが両者にとってかわることができる」とした。しかし、この抽象力も正しく使用されねばならない。もしまちがって使用されるならば、抽出された概念は科学的に無意味なものとなり、かえってわれわれの認識を混乱させあやまった方向に導くにすぎないであろう。レーニンも、正しい抽象は真理を反映するといひ、抽象の積極的意義を強調するとともに、それが正しくおこなわれねばならないことを説いたが、このような抽象の正しさ

を保証するものこそ社会的実践にほかならないのである。

実践が抽象を正しく導くのは、第1に、それが抽象化をおこなう目的を提供するからである。感性的所与からただ無暗やたらに一般的なものを出せばよいというのではない。実践が要求するところにしたがって、対象の特定の性質を抽出しなければならない。そのような性質の認識によって、人間の対象的活動が有効で合理的たりうるからである。実践はそのような目的を抽象力に課するのであるが、こうして抽出されたものはもはや単なる一般性ではなくて、対象の本質である。対象の諸属性のうち何が本質的であるかは、その対象に働きかける人間との関係によって決定されるからである。

したがって、抽象化を導く目的は、主観的・偶然的にあたえられるものであってはならない。対象的实践の指示するところにしたがってあたえられることによって、抽出された概念は実践を導く役割を果しうるものとなるのである。このように抽象は思惟の作用であるにしても、実践と不可分の関係にあるのであって、実践によって正しく導かれ、また実践に役立つものとなるのである。

II

1 思考が正しくおこなわれるためには、実践が規定するところの目的にしたがって抽象がおこなわれねばならない、ということは、実践の内容が重要な意味をもたねばならないことをしめしている。社会的実践の内容を規定するものは何であろうか。いうまでもなく、実践主体が所与の社会においてしめている地位、またはその地位において直面せざるをえない矛盾である。階級社会においては、その階級的地位または階級的矛盾である。主体がおかれている地位や矛盾は主体の要求を規定し、その要求は実践をうながす。抽象を導くところの目的はこのような要求の表現でなくてはならない。資本主義社会においては、資本家は競争の強制法則によって、最大限の利潤を獲得しようとする欲求に不³断にかりたてられる。彼等にとっては、この利潤追求欲に奉仕するもののみが合理的であり、それをさまたげるものは非合理にみえる。このような階級的な

容をもった合理性をもとめて、彼等も資本主義社会の「科学的」分析をくわだてざるをえない。彼等にとって「利潤」が永遠の「原理」的意義をもつならば、資本主義社会の存在は不可易の絶対的前提であるから、合理性の追求もこのワタ内に限定される。総じて合理性という観念は階級的内容をはなれては無意味である。資本家の実践における合理性——たとえば産業「合理化」政策——が階級的内容にみちみちているだけでなく、彼等の「科学」的思考もまたそうならざるをえない。彼等もまた、事態の「科学」的・合理的な認識をもとめるかぎり、具体的なものから出発して抽象的なものにいたり、逆に抽象的なものから具体的なものにかえるという、およそ科学的思考がしたがわねばならない形式としての思惟の円環運動をくりかえさねばならなかった。そしてその思考形式を正しく運用しえたがぎりでは、ブルジョア・イデオログとしての古典学派は多くの科学的成果をあげることができた。しかし、彼等の思考も結局はブルジョアの合理性によって制限されざるをえなかったし、したがってまた科学的抽象の目的もおのづから制限されざるをえなかった。かくて、具体から出発して具体に終る円環運動は、彼等にあっては、具体的所与としての資本主義の絶対的肯定に終らざるをえなかった。資本主義の運動は同質的な循環運動の無限のくりかえしとしてあらわれた。そのような思考形式に自己を限定せざるをえなかったのである。

2 これに反して、労働者階級にとっては事態はまったく逆にみえる。資本家にとっての合理性は、彼等にとっては非合理に転化する。資本家階級にとって産業の「合理化」とみえるものが、労働者階級にとっては収奪の非合理的な強化でしかない。価値法則の貫徹が不可避的に富と貧困の敵対的対立を生みだすならば、価値法則の合理性は資本家のものであり、労働者階級にとっては非合理なものでしかない。しかし、価値法則が、資本主義の基本矛盾を発展させ、かつ激化させることによって、労働者階級の生活を窮乏化するだけでなく、未来の搾取のない社会への展望とエネルギーを労働者階級にあたえるならば、事情は逆転する。価値法則ないし剰余価値法則を正しく徹底的に認識する

ことによって、労働者階級に資本主義の暫時性と未来に対する確信をあたえるならば、この法則を認識し、運用することは彼等にとって、合理的である。

しかし、資本家にとってはそれは非合理でしかないであろう。それは彼等の唯一の・永遠の合理性の規準——利潤原理——を根底から破壊するからである。古典派経済学にみられるような科学的成果が資本主義の未来の危機を萌芽的にしめしていようと、あえてかくそうともしない開けびろげの樂觀主義——真理の源泉である現実はいかなるものでもこれをさげようとししない科学的に合理的な態度——にかわって、いまや資本主義の現実の危機がさげられないという不安におびやかされれば、おびやかされるほど、現実の危機をせめて理論の領域からだけでも追放することによってみづからなぐさめようとする、非科学的・非合理的な態度が支配するようになる。労働価値というにおよばず、主観価値説さえまったく安心というわけにいかなくなり、すべて法則と名のつくものはこれを理論のそとに追いやってしまう。具体から抽象へ、抽象から具体へという思惟の円環運動、あるいは、現象の奥に本質をさぐりその本質から現象を説明する科学的思考はまったく停止し、具体から直接具体へと、あてもなくさまよい歩く「プラグマチズム」が支配する。

3 プロレタリアの合理性の追求は、資本主義社会の崩壊を法則的必然性として把握することを要求する。思惟の活動はこの要請にこたえなくてはならないのであるが、かの円環運動が結局は資本主義社会の存続の絶対的肯定に終わったのでは、それは不可能である。換言すれば、運動を静止的・循環的な反覆としてしかとらえない論理——思考の形式——ではもはや用をなさない。しかし、現実には資本主義が存続している以上循環的運動も作用しているのであって、同質性を保持するように作用する諸要因の分析は、資本主義の存在を証明するためにどうしても必要である。したがって、思惟の円環的運動形態も保持されねばならない。

しかるに、いまや資本主義の没落の必然性が資本主義の運動そのものの内部に生れつつあることが証明されねばならないのであり、すなわち質的な転化が

思考によってとらえられねばならないのである。そのためには、これまでのように同質的循環運動のみを反映しうるような思惟の円環的形式だけでは不充分である。出発点に復帰することが資本主義存続の絶対的肯定に帰結するならば、かえって真実をおおいかくす、まちがった論証となるであろう。

肯定のなかに否定の契機をふくむ存在の弁証法的構造を把握しうるためには、思考の形式そのものが質的により高次の段階に発展しなければならない。弁証法的論理がすなわちそれである。肯定的理解はもはや対象の一面をとらえるにすぎず、しかも相対的固定性しかもたず、やがて変化し質的な転化をとげざるをえないところの、一面にすぎないものとなる。むしろ変化・発展を絶対的なものとしてとらえる思考のあらたな形式が必要となるのである。

労働者階級は、その階級的利害からして資本主義に対して革命的否定者として対立せざるをえないのであるが、それにふさわしい理論的武器を獲得するためには、思考の形式そのものを飛躍的に発展させねばならなかったのである。

4 この弁証法的論理によって資本主義の運動はその全容においてとらえられるのであるが、それは資本主義の生成・発展・消滅の過程をつつみこむことをも意味している。直接感覚の対象として存在するところの資本主義社会だけでなく、過去におけるその生成の過程——間接的な経験的素材としてあたえられる——をも包括するのみならず、もはや感性的経験を越えた未来の予見をも包括しうるところの、換言すれば、歴史過程の論理的把握を可能ならしめる思考形式となるのである。個々の概念はもはや固定・静止したものとしてではなく、その生成・転化において把握され、資本主義の歴史的発展法則をも諸概念の構築物として思惟において再現しうることになったのである。こうして論理の発展は不可避に歴史の発展に照応するものとなるのであるが、もとより現実の歴史過程そのものに直接対応するのではなく、あくまで諸概念の連鎖として反映されるのである。それにしても、これによってはじめて歴史は科学の領域に引きこまれたのであり、そして、そのためには唯物論の基礎上に弁証法的論理がうちたてられねばならなかったのである。

5 しかし、思考においては、対象の全体を一挙に把えることはできない。変転・流動つねなき諸現象のうちに、まず恒常的・普遍的なものを見出し、概念をつくりだすことが、第1段階として欠くことのできない操作となる。形式論理学はこれをおこなったのであるが、多くはこの概念を形而上学的に固定してしまった。古典学派もまさにそうしたのであって、彼等は多様な現象から価値・貨幣・資本等の概念を抽象し、科学的経済学の確立に大きな寄与をしたのであるが、同時にこれらの概念を固定した・永遠に変わらない範疇であると思なしたために、資本主義を生成・発展・消滅の運動過程においてとらえる道をみづから閉ざしてしまったのである。これに反して、マルクスはさらにすすんで概念の固定性の外観を暴露し、概念そのものを生成・転化するものとして把えることによって、客観過程の変化・発展を反映しうるものとした。まず、対象の奥に潜む本質を、ついでその本質そのものの変化をとらえるという二段の階程をえて、対象の本質をよりふかく把握できたのである。弁証法的論理は、形式論理を形而上学から解放したうえで、これを包摂・止揚したのであって、単純に否定したのではない。むしろ、一定の範囲内での形式論理の妥当性を認め、かつ思考の進行の初歩的段階として積極的にその意義を確定し、しかるのちに、より高次の弁証法的論理の一契機として止揚したのである。

したがって、具体から抽象へ、抽象から具体へという思惟の円環運動は、もはや単なる円環運動ではなくなる。認識の第1階程では、対象の存在を確認すること——すなわち、対象が無限定に流動・変化するものであれば、われわれはそれが何であるかを知ることにはできない。質の同一性が保持されることによって、結局は相対的ではあっても、その事物の存在（何であるか）を概念的に認識することができる——が必要であるから、具体—抽象—具体という思惟の運動は、出発点たる具体物からその本質（何であるかを規定する質的特徴を）つかみとり終局点においてふたたび具体的に概念的形態で把握するところの、円環的性質をもたざるをえない。しかし、その第2階程は本質のよりふかい内容、すなわち本質をそれ自体変化するものとして、その質的發展過程を諸概念

の複雑な諸関連（いわゆる事物の内的構成）として全面的に把握する思惟の過程でなくてはならない。終局点が同時に質的に新たな円環の出発点としてあらわれるような思惟の形式でなくてはならない。これは自己完結的な運動としての円環運動の崩壊にほかならないであろう。こうして思惟の全運動は円環的運動を内包しつつ、常にそれを打ち破って質的に新たな円環運動に移行・前進してゆく螺旋的軌道をえがいて進行するものとなるのである。事物を運動の過程において把えようとするかぎり、理論的体系はこのような螺旋的性格をもたねばならないのである。抽象から具体への上向過程があたかも思惟の創造的な自己展開のようにみえるのも、本質そのものが肯定的契機と否定的契機の対立・抗争という性質をもち、諸概念による本質の一層精密な規定が、これら再契機の対立の一層の発展・多様化・複雑化を反映するものにほかならないからである。

マルクスの『資本論』の理論体系はこのようなものであった。それが資本主義社会の内的組成を問題にするとマルクスがいうとき、そして、この内的組成を下向・上向法によってあたかも思惟そのものの構築物であるかのように、諸概念の諸関連として反映したというとき、上にのべたような思惟の螺旋的運動形態によって具体的なものを思惟の上に再生産したものにほかならない。その結果は、単に資本主義社会の内部の組成を静的にしめすだけでなく、それを運動の過程において、すなわち生成・発展・消滅の過程において、肯定的理解のうちに否定的契機をふくむものとしてしめしえたのである。

6 要するに、人間がおかれている社会的地位または社会的矛盾に応じて抽象を導く目的が規定され、その目的に応じて所与の具体的なものの全内容が思惟のなかにくみつくされるためには、思考の形式そのものが発展しなければならない、すなわち、思考の形式は、思惟主体の社会的実践の質的内容によって規定されて、具体的なものをより深くより豊かに把握しうるものとなる。しかるにこのことは、思惟の活動は人間の社会的実践すなわち対象的活動を超えてはおこなわれるものでないということをもしめしている。対象の本質をより深く反映するにしても、対象そのものからぬけだすものではない。対象的实践を

通じてあたえられた「直観と表象との概念への加工」にすぎない。逆にいえば、思惟の産物が科学的に無意味なものでないためには、「主体が、社会が、前提としてつねに表象にうかべられていなければならない」のである。

しかしながら、そのことは思惟を単に受動的なものとみなすことではない。思惟によって具体的世界を「わがものとする」ことは、やはり、思惟の能動的働きにほかならない。この能動性は、特に、思惟の行動様式としての思考形式も発展しなければならないという点にあらわれる。抽象の目的は社会的実践によってあたえられるものであり、また「頭脳がただ思弁的にだけ、ただ理論的にだけふるまうかぎりでは」、それは客観的實在に一指もふれるものではなく、「実在的な主体は依然として頭脳の外部でその自立性をたもちつつ存続する」のであるが、思考の成果が社会的実践主体の「頭脳」をとらえて、「物質的力」に転化するためには、すなわち実践主体の行動の指針たりうるためには、具体的現実をより深く、肯定的契機だけでなく否定的契機をも、思考によって把えていなければならない。そして、そのために必要な思考の形式——理論体系を創造的に発展させねばならないのであって、ここでは認識主体の能動性が不可欠のものとなる。科学的創造「活動」ということがいわれる所以である。もとより、それはそのもの自体としては対象変革的な実践ではない。また、それは理論を現実実践主体の物質的力に転化せしめるための活動（たとえば普及活動といわれるもの）でもない。この種の活動はむしろ社会的実践の一部である。科学的創造活動あるいは理論創造活動も、その目的と素材を社会的実践によってあたえられるという点からいえば、社会的実践に従属するものであるが、それはあくまで基本的な関係においてそうでなくてはならないというのであって、個々の場合に、一定の範囲内で、理論的活動が実践よりも先行することはありうるし、逆に遅れることもある。このこと自体理論活動の独自の能動性を逆にしめしているものといえる。

理性的認識において、思惟の活動が正しく行なわれるためには表象がつねに前提としてあたえられていなければならないということは、逆に思惟の活動が

充分におこなわれるためには、その深さと広さにおいて必要かつ充分な表象があたえられていなければならないことを意味する。感性的表象なしには理性の働きようがないからである。しかるに、表象は感性的働きによってあたえられるのであるから、理論的認識が完全であるためには、感性的認識がまず必要かつ充分な程度に働いていなければならない。対象に関する感性的認識はその対象に対する人間の働きかけ、対象的実践によってあたえられるのであるから、充分な表象を獲得するためには、認識主体が対象的実践に意識的・能動的に密着することが必要である。客観的過程の発展は人間の対象的活動なしにはおこなわれえないが、人間の意識からは独立に進行する。特に、発展を推進する新しい要素は最初は偶然性の外観のもとにあらわれるから、直観と表象の網の目から抜け落ちやすい。マルクスはモンブランの山のような龐大な資料の蒐集を説き、レーニンが対象全体の資料をもれなく観察する必要を説いたのも、また毛沢東が大衆から学べといったのも、具体物の本質の特徴を全面的に明らかにするためには——特に肯定面だけでなく否定面をも——、それが必要不可欠の前提だからである。資料を使いこなす能力は思惟のものであるが、充分な資料なしにはこの能力も発揮されえない。したがって感性的認識段階ですでに認識主体の能動性が必要である。

このように認識主体の能動性は、理性的認識においてはもとより、感性的認識においても、対象の全面的認識のために必要・不可欠のものとして要請されるのである。対象的実践が自然に認識の発展をもたらしものではない。

〔註〕 認識主体の問題を、現実の社会の具体的条件のなかでみる場合には、その主体の所属する階級関係のみならず、階級の成熟の度合、階級闘争の発展の度合、それに対応する理論活動の分化の度合等々を考慮しなければならない。これらを無視して、一部局での特殊な理論活動の諸条件を一般化して論じたのでは、理論と実践の関係の正しい認識を誤ることになるであろう。一例をあげれば、政治的実践活動との関連においては、教養としての学問と専門的学問との分化が特別の意義をもってくる。毛沢東は、革命的政党の幹部は教養として経済学や歴史学を学ばねばならないといったが、政治的実践者を直接導くものは社会の全体像をあたえるような教養としての学問

であり、専門的学問ではない。政治的实践者にとって前者は欠くことができないが、後者は必ずしも必要ではない。これは政治活動の特殊な性格にもとづいている。いわゆる職業的革命家の仕事は、個々の階級的利害にもとづく労働者階級の闘争を人類の歴史全体のなかで位置づけ、労働者階級の「歴史的使命」を果す闘争にまで牽きあげていくことにある。このような実践に直接科学的基礎をあたえるのは、教養としての学問にほかならない。専門的学問はこのような教養としての学問に養分をあたえるものであっても、直接そのような実践に結びつくものではない。また教養としての学問は専門的学問の成果を吸収し、その内容を豊かに高度にしてゆかねばならないが、それなりに専門的学問とは異なる独自の領域を構成するものである。もとより、部分を全体のなかで位置づけ、部分を通して全体を明らかにすることは学問一般に要求されるものであるが、政治の領域においては直接実践に結びつくものが全体像に関する知識であり、全体像そのものが特殊な重要性をもつ。今日の政治的实践の発展はその活動のなかにより多く専門的知識を吸収する必要を増大しているけれども、それが実践と結びつくのは一たん全体像に関する知識に吸収されたのちであり、したがってつねに後者に従属する関係になくしてはならない。もちろん、教養としての学問が、専門的学問の基礎として、後者の発展に役立つ側面もある。大学の教科が教養教育を専門教育に先行させていることを見ればあきらかであるが、これだけが両者の唯一の関係ではない。政治の領域では逆の関係が重要となることに注意しなければならない。もちろん、専門的学問といえども基本的には実践をはなれてありえないことはいうまでもない。

Ⅲ

1 これまで、経済学の認識方法が、労働者階級の実践要求に応じて、それまでの古典学派の方法とは根本的に異なる新たな発展をもたらし、弁証法的な論理構成をもつにいたったことを、経済学の方法としての下向・上向法について考察してきた。これは、単に階級の見方の相違というような相対的なものではなく、思考の形式そのものの発展を促し、客観的対象の本質をより深くより全面的に把握することができるようになり、より高次の科学としての経済学が確立する方法的基礎があたえられたことを意味した。

しかし、19世紀中葉に活きたマルクスの資本主義理論が、資本主義の基本的

特徴を明らかにしえたとはいえ、時代的制約を脱れえなかったことはいうまでもない。すなわち、マルクスの経済理論も、特定の歴史的条件のもとでのみ真理性を主張しうるのであって、絶対的なものでありえないことを意味する。したがって、歴史的条件の大きく変化した帝国主義段階においては、あらためてその真理性が再検討され、具体化されねばならない。レーニン『帝国主義』論において見事にその責務を果たした。客観的過程の発展は意識から独立におこなわれるから、あらたな発展は意識にとってつねに未知の感性的経験としてあらわれる。それを理性的認識にもたすためには、あらためて、諸現象の本質を概念的に再構成してゆかねばならない。この際、マルクスによって発見された弁証法的思考方法や資本主義の理論は認識をすすめる指針とはなりえても、ただちにあたらしい段階に妥当する一般的理論としての地位をあたえられるわけではない。それは歴史の検証を経なければならないのである。

2 マルクスの『資本論』がすぐれているのは、まさにこの点を明らかにしたことこそであった。それは経済学的諸範疇・諸概念をその生成・変化の相においてとらえることによって、それらの歴史性を明らかにし、それらの固定性が相対的なものにすぎないことをしめした。しかし、同時にそれによって、19世紀中葉にいたる資本主義の発展過程を概念的に——概念および諸概念相互の関係の生成・発展として——把握する途をひらき、資本主義の生成・発展・消滅の法則的必然性をあきらかにしたのである。また、資本主義的生産様式の基礎上で、歴史的発展段階が生じうることの必然性をもしめすことができた（初期資本主義段階から産業資本主義段階への発展）のである。資本主義の発展は、その没落の歴史的条件をみづからつくりだすだけでなく、資本主義そのものの内部での段階的発展をもたす歴史的条件をもみづからつくりだすこと、をあきらかにしたのである。生産力の発展とともに資本制的生産関係の矛盾の量的増大は、資本主義のワク内で、すなわち資本主義の原理を維持するための新たな解決の形態をつくりだすのであるが、この形態は矛盾を一層深化し飛躍的に発展せしめる新たな特殊な要因に転化することによって、資本主義の発展過程

を段階的に特徴づけたのである。産業資本主義段階を前段階から区別するものは、機械制大工業の普及とともに生じたところの、世界恐慌を頂点とする全般的過剰生産恐慌にせめられる矛盾の新たな様相であった。恐慌はこの新たな矛盾の解決形態であるとともに、矛盾激化の表現でもあったのである。注意すべきことは、この解決形態は商品交換の矛盾がその解決形態としての貨幣を生み出すというのとは、同じ解決形態といっても、まったくその性質を異にしている。貨幣形態の発生も、商品生産の矛盾を拡大再生産するのみならず恐慌の抽象的可能性をさえ生み出すけれども、商品生産そのものの危機を現実化しない。これに反して、恐慌は、一面では過剰生産力の破壊によって資本主義の発展のあらたな条件をつくりだすが、同時に資本主義的生産様式そのものがすでに時代遅れになったことを赤裸々にしめすことによって、資本主義そのものを危機に直面させる。それは、なお全般的危機ではないが、危機の周期的な露呈である。危機の質的な発展が段階規定を意味あらしめるのである。

3 マルクスの経済理論はこのような弁証法的、歴史主義的特徴をもっていたからこそ、19世紀末以後の資本主義のあらたな発展段階に対しても適用・具体化されうる可能性をもったのであり、レーニンはそれを実証してみせたのである。マルクス経済学の理論の螺旋的進行の形態は客観的過程そのものにふくまれている質的發展の概念的な反映にすぎない。すなわち、飛躍的發展の歴史的條件の発生を必然的・法則的なものとして把握することを可能ならしめることによって、機械的法則観の狹隘さを打破し、歴史的法則的説明をなしとげ、歴史過程をその連続性と非連続性の統一としての弁証法的過程としてとらえることができたのである。そして経済学が歴史的條件の発展に応じて、無限に自己を具体化しながら、全体として統一的体系性をたもちうる路をひらいたのである。

(未完)